

『サイパン島脱出記』

ゲルトルーティス 斉藤 延枝

一九四〇年、私は父の転勤で横浜港から現在ミクロネシアのポンペイに行くことになった。当時は日本の委任統治の島であった。父は私が六年生になった時「小学校を卒業したら、高等女学校へ入学しなさい。日本でもサイパンでもよい。勉強しながら自分で決めなさい。」と言った。私は少しでも両親の近い所にしようと考え、南洋庁立サイパン高等女学校に入学した。

両親との別れは初めてである。旅立つ時は大粒の涙が止めどなく流れた。父は私を見て言った。「可愛い子には旅をさせよ」という諺がある。行きなさい。」三人兄弟の一人娘を手離す父の気持がこの諺によく表れている。一学期は休校だった。寄宿生は私だけになった。私は毎日遠浅の海岸に出て泣きながら叫んだ。「お父さん、お母さん、私はどうしたらいいの……？」

「……？」 寄せては返す波の音に私の声は消されていった。ある日、「さうだ、日本へ帰ろう。一日でも早く……」思うと同時に走った。南洋庁サイパン支所へと走った。受付で「お願いします。」と数回

「君、ひとりで帰るの……？」  
「はい、私はボナペから来て入学したので。両親とは連絡がとれません。私は日本に帰りたいのです。」  
「わかった。早速日本へ向う船があるか調べて、知らせる。」  
二日後、連絡があった。  
「近いうちにサイパンを出航する船がある。海軍の輸送船と木造船の輸送船だ。君はどっちに乗りたいか……？」

「海軍の輸送船……」

「軍艦は鉄でできているから、木造船より重いね。魚雷は軍艦に命中する。日本へ帰国する家族は木造船に乗るが君は軍艦でいいのだね。」

「はい。」  
数日後、私の乗った輸送船と木造船は、前後左右を戦艦に守られて日本へと航海した。ある夜、ボツ……、ボツ……、と不気味な汽笛が目が覚めた。私は急いで甲板へ出た。白波のたつはるか彼方に黒い細長いかたまりがゆっくりと海中に消えていく。私は近くにいた兵士に「あれは何？どうしたのですか。」「木造船がやられた。」



慶洋丸 (東洋汽船：6441総トン)

東洋海運の姉妹船「加茂川丸」とともに太平洋戦争開戦直前の追加分として、特設航空機運搬艦となる。

1944年6月12日、サイパン島沖で米空母機の攻撃を受け沈没する。

参考資料：

[Ship Wrecks & Tecnical Diving Web-Site]  
<http://www.takedive.net/>

君は甲板にいなさい。この船も魚雷が二発船体をかすった。君は泳げるか？」「はい、泳げます。」  
「もし、この船が沈みかけたらボートを下ろす暇がない。そこにあるすのこ(積荷の台)を投げる。それに向って飛び込め。」  
「はいっ！」  
私はきらきら輝く星を見つめながら夜明けを待った。間もなく、あちらからもこちらからも戦艦が姿を現し無事横浜港へ。

この船の名は「慶洋丸」と記憶している。このときの情景は今も私の脳裏に深く刻まれている。  
次号につづく。